

■ 住職戯言



「諸法無我」ご縁の実践

「諸法無我」ご縁の実践

昔から、私たちはご縁を大事にしきました。

ご縁とは、物事は、必ず、因に縁って起こるという仏教の教える真理からきた言葉です。

仏教の教えの中心の一つに「諸法無我」があります。

『広説佛教語大辞典』によれば、すべてのものは因縁によって生じたものであって実体性がなく、我というものが無いという事です。

私という存在は、自分一人でここにいるわけではなく、家族をはじめとしたさまざまな因に縁ってあるのです。

「諸法無我」とは、ご縁が、物事の一つ一つに現れた様相であり、私やあなたの実践であるということです。

仏教学者の鈴木大拙氏は『禅とは何か』の中で、自分ということをごこう言います。

「自分ということは、すでにそこに他というものを認めているのである。自分だけの考えというものは無い。

自分というときには、そこに他というものが含まれている。社会というものが含まれている。」

この一節は、釈尊がお悟りの後、梵天によって、自分一人の悟りに安住するのではなく、仏の教えとして人々に説いてほしいと勧請された「梵天勧請」ということがあります。

そのことを、鈴木大拙氏は、釈尊の心の葛藤としてとらえ直して、考え正したところの言葉です。

鈴木大拙氏は、自らの中にすでに他を含んでいると言います。

自らは他に縁ってあるのです。“我”というものは、実体としてありません。因縁によって、ここにあるのです。

自らの存在は他の存在を因縁としてあると釈尊は、お悟りになりました。

仏教とは、釈尊が自らの悟りの完成のために、人々にその教えを説いてくださったと理解すべきと鈴木大拙氏は言うのです。

「諸法無我」の実践が、釈尊に仏教を開かしたと言うのです。

臨済会刊の『平和への道』で山田無文老師は、「無我の実践」と題し、神戸のある奥様の言葉を述べています。

その奥様は十年ほど前にご主人を亡くしました。五年ほど前からは、山田無文老師の提唱を聞きにこられていました。

「主人を亡くしてから、家の経済を嫁に任せてなるべくおとなしく余生を送らなければいけないと覚悟を決めました。

ところが、朝早く目が覚めてしまい、仕方がないから掃除をします。

嫁は、起きて来ません。それからご飯を炊きます。

ご飯が出来た頃、皆ぞろぞろ起きてまいりますが、一度も“ありがとう”とも“すみません”ともいってくれたことはありません。

私が、こんなに早くから起きて働いているのに、嫁たちは平気で寝ている。

“ありがとう”とも言ってくれたことないと思うとお掃除するはたきが、ついパンパンときつくなります。

お茶を沸かす薬缶がガチャガチャ鳴り、ご飯を炊く釜やなべがゴトゴト鳴ります。

お恥ずかしいことですが、そんな私でございます。

お話を聞きに来るようになってから“我を捨てよ。我があってはいかん。”とよく教えていただきますが

“我”とはどんなものだろう、“我を捨てる”とはどうすることだろうと、初めのうちは少しも分かりませんでした。

ところが、あるときふと気がつきました。

私のはたきがパンパンときつくなる、これが“我”だったな。薬缶やなべがガチャガチャいう、これが私の“我”だったな。

“我を捨てよ”とはこれを止めよとおっしゃるのだなと気がつきました。

それから、なるべく音のせんようにお掃除をし、なるべく静かにお茶を沸かしご飯を炊くようにいたしました。

するとどうでしょう。

嫁に来てから一度だって“ありがとう”とも“すいません”ともいつてくれたことのない嫁が、私の前に手をついて、“お母様、毎朝早く起きていただいてありがとうございます。わたくし朝寝をいたしましてすいません”とあやまってくれました。

私は嬉しくて、それから本当の親子のように仲が良くなりまして、孫たちも“ばあちゃん、ばあちゃん”と慕ってくれまして、この頃は幸せな日暮しをしています。」

他とのぶつかりあいの中で、音は立ちます。

“我”も、他とぶつかる立つのです。

この奥様も嫁とのぶつかる中で、“我”が立ちました。

でも、山田無文老師のお話を聞いて、自らの“我”が立っていることに気づいたのです。

この気づきによって、自らが立てる音を静め、“我”を静めることができました。

我を静めたことによって、家族とのご縁がより優しい流れになりました。

「諸法無我」とは、本来、一切のものは因縁によって生じますので実体性のある“我”は無いということです。

ところが、他とぶつかることによって、“我”が立ちます。

“我”が立つことによって、人のご縁の流れが妨げられてしまいます。

それは、人と人の関わり合い、日々の生活の音として表れるのです。

“我”が立っていることに、自分では気づくことはなかなかできません。

日々の生活の音がきつくなれば、それは、“我”が立っているのかもしれない。

もし、その音に気づくことができたならば、一挙手一投足を優しく丁寧に心掛け、“我”を静めていきたいものです。それが「諸法無我」の実践と言えらると思います。